

学校名	研究課題	研究手法
栗崎小学校	道徳	家庭との連携

### 1 研究の重点と具体的な取組

#### (1) 重点1 特別な教科道徳の授業の充実

教科書を通して授業を実践し、児童の道徳性をはぐくみ、変容を評価する。児童の励みとなるよう、よさや可能性を家庭に伝えていく。

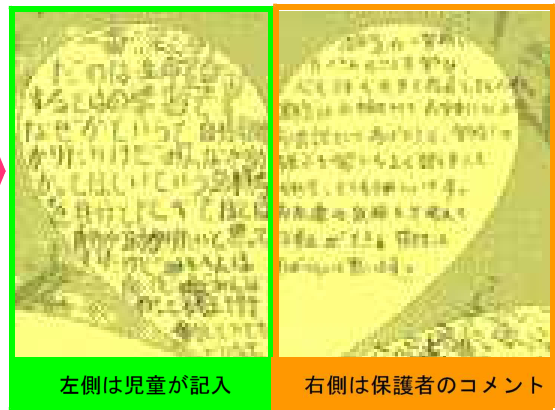
#### あわはーと（道徳ノート）



年間を通して使用するノート



授業のふり返り



左側は児童が記入

右側は保護者のコメント

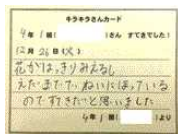
表紙の3つのハートは学期ごとのふり返りに活用

#### (2) 重点2 連携のための体制づくり

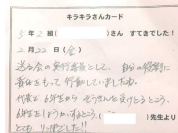
教育活動全体において道徳教育の推進を図り、道徳アンケートや「キラキラさんカード」（児童を励ますメッセージカード）の交流を通して、家庭と学校の双方向で児童を認め励ます体制をつくる。

#### 「キラキラさんカード」

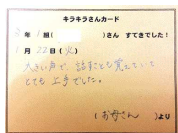
3色のカードがあり、各教室前のポケットフォルダーに全員分を掲示



黄色：児童→児童



桃色：教師→児童



柿色：保護者・地域→児童



#### (3) 重点3 多様な場面を活用した地域・家庭とのつながり

地域学校協働活動事業や学校運営協議会などを活用し、児童の道徳性について協議し、課題を共有し合う。地域・家庭と学校が一体となって児童をはぐくんでいく意識を高める。

栗アップ「おたやの森プロジェクト」(地域学校協働活動事業)を生かした全校道徳



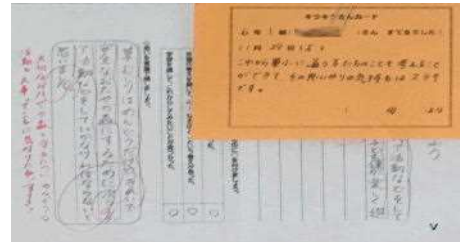
全校児童が校舎裏のおたやの森の枝を拾う



避難時に備えボランティア・育友会・教職員で新杭打ちを実施



全校級において担任と校長・教頭による道徳のT・T授業



「栗崎小の未来」について考えたことを保護者に伝え、「キラキラさんカード」に書いてもらう

## 2 取組の検証

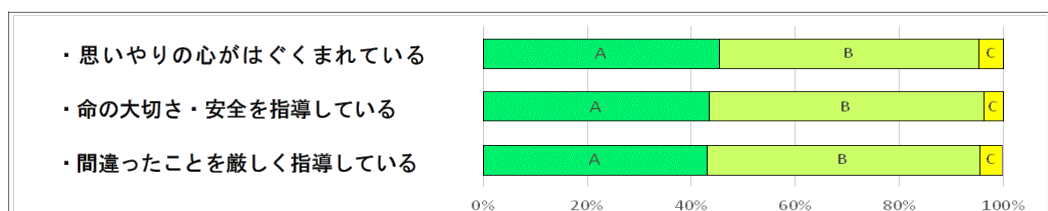
### (1) 児童アンケートより

児童の道徳科への意識や他者を大切にする心などに変化が見られ、道徳の授業が充実してきている。



### (2) 学校アンケート (保護者アンケート) より

11月に実施した保護者アンケートにおいて、質問事項で道徳の内容項目にかかわる3つの質問の「A (あてはまる)」「B (だいたいあてはまる)」の評価が高い。概ね良好であることから、家庭においても学校での道徳教育の充実が反映されてきていると考える。



(3) 学校運営協議会より

地域の人・保護者を交えた学校運営協議会の場でも、道徳教育について協議し、児童の道徳性がはぐくまれてきていると評価を得た。

**【協議会内容一部抜粋】**

- ・道徳に取り組んでくれているおかげで、優しさを感じる。会話の中でも、優しく声かけしていることが見られうれしい。
- ・授業参観を通して、子ども一人一人が成長したなあ実感できた。小学校に入って体だけでなく、心も成長したと感じる。
- ・地域・学校・保護者が一体となって取り組める「おたやの森プロジェクト」を来年度も実施し、みんなで心をはぐくんでいきたい。

### 3 成果と課題

(1) 重点1

研究授業や公開研究発表会の授業では、前授業者の課題を改善するという意識のもとで実践を積み上げることができた。発問を吟味し、思考ツールやアイテムを多様に用いて、児童の思考の流れに沿った「考える道徳」の授業ができた。深い学びを通して、一人一人が納得解を得る「栗崎道徳スタイル」ができたことが、大きな成果である。

課題としては、道徳の評価の観点と視点の認識が十分ではなかった。子どもを「勇気づける」ために、道徳性をはぐくむ結果だけではなく、はぐくんでいく過程を評価していくことが今後の課題である。

(2) 重点2

「キラキラさんカード」や道徳だより・学校だよりを活用して、児童の学習状況や成長の様子を家庭に発信した。さらに、あわはーと（道徳ノート）の表紙のふり返りの場を年3回（学期に1回）を増やしたことで、保護者が児童の道徳性について考えるようになってきた。

「褒め・認め・勇気づける」評価につなげるために、児童の道徳性を見取る教師の力が十分ではなかったことが課題である。例えば、「キラキラさんカード」を時系列に並べてみることで、長期的な変容が見えてくる。縦に色ごとに並べると、学校での様子と家庭・地域での様子の共通点や相違点が明確になる。このような見取る力は経験年数によって異なるため、今後、ベテラン教員が若手教員の子どもの見る目を育てていくような組織的な取組が必要である。

(3) 重点3

地域学校協働活動事業の一つとして実施した「おたやの森プロジェクト」後、全学級で道徳の授業を実践し、学校を支える人の気持ちや、自分とのかかわり方について考えた。その授業の児童の感想を保護者に伝え、コメントを書いてもらうことで、全保護者を巻き込んだ道徳教育の実践ができた。そこには地域を大切にしたいという共通の思いがあることから、学校と家庭との間に信頼関係や協働意識が芽生えたことが、大きな成果であった。

来年度は、このような活動を積み重ねることで、ふるさとがはぐくむ道徳教育へとつながり、より深い連携ができると考える。そこで、どのタイミングで、どのような活動を取り入れ、どのような道徳授業を実践していくか、今年度の研究の検証のもとでカリキュラム・マネジメントしていくことが課題である。年度当初から即実践できるように、「栗崎学習スタイル」を構築し、来年度へと継承していく。

